



映画雑感 11

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

源から問い直す問題作。

▼吉田修一の短編集「犯罪小説集」を基に瀬々利久監督が映画化した「楽園」は、日本の社会に色濃く巣くっている理不尽で愚かな悪意の恐ろしさを白日のもとにさらします。怯えながらも居場所を探す難民の青年を、まるで彼が現実存在するかのように造形し切った綾野剛はいつもながら見事でした。

▼19年後半のた邦画の続きです。まず俳優のオダギリシヨ一の長編映画初監督作品「ある船頭の話」。寒村の渡し船の船頭を柄本明が重厚に演じます。町と村を結ぶ橋の建設が進む中で自らに与えられた生業を淡々とこなす主人公の前に瀕死の少女が流れつきます。助け上げて川べりの掘立小屋に住まわせたことで主人公の運命が大きく変わっていきます。文明がもたらす負の側面や人間の在り方を根

▼「真実」は、カンヌ国際映画祭で、最高賞に輝いた是枝裕和監督が、自らの脚本で国際的な俳優陣をキャストイングした国際共同製作作品。大女優の母が自伝を刊行したのを機に米国からやってきた娘一家。母と娘の確執が再燃します。母娘を演じるカトリーヌ・ドヌーブの貫禄とアカデミー賞女優ジュリエッ

ト・ピノシユが演ずる愛憎劇は、社会の底辺にうごめく人間模様を描いた前作とは全く違った監督の力量を印象付けるものでした。

▼亡父の通夜の席で、母は仕出し料理をキャンセルして手料理の目玉焼きを振舞います。次々と運ばれる手料理を通して過去の思い出が浮かび上がり、やがて寡黙だった父の真情が明らかになります。長編初挑戦の常盤司朗監督の「最初の晩餐」は、個性豊かな俳優陣を得て心に沁みる秀作になりました。

▼子供を守るために暴力をふるう父親を殺害した母親が刑期を終えて15年ぶりに帰宅します。しかし、周囲の冷たい視線の中で困難な日常に苦しんできた子供たちの思いは複雑です。「ひとよ」は、白石和彌監督が一筋の希

望を見出す家族を描いた意欲作。

▼若手監督中川龍太郎の「私は光を握っている」は、田舎育ちの話下手な少女が東京の下町で自分の居場所を見つけるまでを描いた成長物語。主演の松本穂香がいつものまにか逞ましさを身につけていく田舎娘を好演。

▼オムニバス映画「その瞬間、僕は泣きたくなかった」は、監督と主演を、それぞれ三池崇史とAKIRA、井上博貴と佐藤大樹、松永大司と今市隆二、河内広樹と佐野玲於、行定勲と小林直己が務めて、短編ながら鮮烈な印象で胸につきささる寓話を紡ぎだしました。誌と音楽と映像を融合させるプロジェクトの第三弾ですが、もっと多くの人に知られていい試みです。